6　銅蟲葡萄図花瓶

吉岡廣利

一対

明治十八年（一八八五）
銅、鍛造
各径二七・〇、高四四・五

銅蟲（どうちゅう）とは、銅板を鍛造する際に鎚目（つちめ）をほどこし、薬を燻して磨き上げることで黒味がかった光沢のある風合いとした銅製品である。安芸広島藩の浅野家に仕えた江戸初期の銅細工師・佐々木伝兵衛（銅蟲清氏）が、その熱心な仕事ぶりに「銅の虫」と呼ばれたことからその名が付いたと言われている。

本作品は、獅子喰遊環の耳を付けた花瓶を鍛造で成形したもので、胴部に鏨による陰刻で葡萄の図様を表わしている。首、肩、裾には点刻で文様をほどこした毛織（モール）と呼ばれる銅板が鋲留めされている。本作品を収める箱の蓋裏に「明治十八歳首夏日　廣陵住　吉岡廣利造」の墨書がある。また箱には作者の商標が貼付けられ、「広島県広島大手町一丁目住吉岡常三郎廣利造」とともに明治十四年（一八八一）の第二回内国勧業博覧会で三等有功賞を受賞したことが記載されている。作者の吉岡廣利は、江戸時代後期に広島城下で活動した装剣金工として知られるが、その一方で銅蟲の制作も手がけていたと伝えられており、本作は制作年代の明らかな貴重な作例である。制作に携わる職人が少なかったため、明治期の銅蟲は輸出向けに大量に作られることはなかったとされるが、こうした花瓶は新しい時代に応じて作風を変化させていったことを物語る作例と言えるだろう。明治十八年七月から八月にかけて行われた、明治天皇の山口広島岡山三県巡幸に際して御買上げとなった作品である。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面――研ぎ澄まされた技と美
三の丸尚蔵館展覧会図録No.82

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan